

モンゴル遊牧民における伝統のグローバリゼーション

小長谷 有 紀

今日のテーマはどれも興味深いものです。土地保護という問題について言いますと、遊牧民の間では土地の私有がありませんでした。それに対して昨年5月、土地所有法が国会でほとんど議論されないまま通過して施行されました。国際金融機関の圧力であるとも言われています。世界銀行にしてみれば、お金を貸した後、取り立てるものがないじゃないかということで、債券の設定のために土地を私有化すべしという流れがあって、反対していたはずの人民革命党が政権を握るといきなり実現してしまいました。何千年来、土地の私有をしていなかった人々の間にそういう現象が起きています。この問題は興味深いのですが、今日は「野生の思考」をテーマにお話をしたいと思います。

モンゴル高原はどんなところか。皆さん、ご承知のように中国とロシアの間にモンゴル高原が広がっています。高原の自然環境の特徴は乾燥していることです。年間降水量が、ゴビ砂漠では50ミリ以下です。日本なら1日で降る量が1年間にまばらに降る程度の雨ですから非常に乾燥しています。また寒冷です。ある年の5月1日は吹雪でした。特別寒い年ではなく一般的にそういうことはよくあります。8月に雪に見舞われたこともあります。平均気温は年間マイナスになってしまう高冷地です。緯度が高だけでなく、高度も平均1300メートルです。比叡山の2倍の高さがあります。ただし、それが貧弱な自然環境かということ、そうではなく、実は夏がすばらしいのです。ユーラシア大陸にずっと乾燥地が広がっていますが、大体、カザフスタンより西側に行くと冬雨型になります。地中海性気候のような感じです。雨は寒い時に降ります。それに対して東アジアのモンスーン域に入っているところ、内陸ですからモンスーンの直接の影響があるわけではないですが、ユーラシア大陸の東端に位置するモンゴル高原は夏雨型です。日照と気温がセットであるわけですから、草原としてはそこそこ育つ。アフリカの牧畜をやっている人が、もしモンゴルに来たら天国に見える。何の苦勞もなく生きられる場所というふうに感じられるそうです。

ウランバートルの気象データの統計で、こういうところだと理解するわけですが、空間的、時間的変動の大きさは隠れてしまって、統計からは読めません。毎年の月々の変化を見ないと読めない。長期的なデータを見なければ自然環境の特徴はわからないというのが乾燥地域の特徴です。

私は25年前、留学していてウランバートルに住んでいて雨に濡れて帰ってくると「お前はどこに行っていたか。どこで濡れたか」と言われました。ウランバートル市内は人口50万もない小さな都市です。「ウランバートルは雨」という天気予報があったとしても、どこに雨が降ったか、そこに降ったのか、という感覚で空間的にまばらに降るのです。時間的にも変動がある。今年は降る、来年は降らないというマージナルな乾燥地域ならではの変動があります。変動が

あるがゆえに、それにいかに対応するか。それが自然資源の利用の最大のポイントになります。

遊牧の持つフレキシビリティとは、自然環境がもともと変動することに対していかに柔軟に対応するかという戦略なのです。まず放牧地は季節的にいろんなところを利用をする。大体、夏はここを利用すると決めています、1か所ではなく、複数あって、その中から選択することができるのが特徴です。また天災時、異常に寒いとか、異常に雨が少ない時には、部分的に自分たちの一部を派遣したり、全く越境してしまって、長期的に滞留したりします。これは互いにするので、嫌だと拒否することはできない。細ってきている自然環境のところに災害にあってやってきた人たちを受け入れなければいけないことになっていますが、本当は受け入れたくない。しかし自分もいつかそうしてもらおうということがある。長期的なスパンでみると相互性のある慣習ですから、彼らは拒否できないようです。

自然環境だけでなく、社会環境も変動します。モンゴルの場合は「先住民」という言葉で表現するのはあまり適さないと思います。というのはモンゴル高原には歴史的には匈奴、鮮卑、高車、突厥、ウイグルとかいろんな人々が来たわけですが、誰が先住民かということですね。常にその主役の座についている集団に与えられた名前が変わっている。母語がモンゴル語系か、テュルク語系かも入れ替わっていますので、最初にいたということを既得権にしてしまうと歴史的に誰も主人公でなくなってしまう。常に人々が混じり合って混成部隊になっているわけです。今、モンゴル人と言っている人も、もともとトルコ語を母語として話していた人々も13世紀、モンゴル人になってしまいます。社会的には常に変動があって人が入り交じっている。戦闘状態はしょっちゅうある。そんな中で、変動に対して逃げる、人災に対しても天災と同様に自分で逃げて対応するというフレキシビリティがあると見ていいと思います。

ところがモンゴルの場合、近代化という時、社会主義を選択したわけです。いろんな近代化の方法があったでしょうが、ロシアと中国の間に挟まれたモンゴルは社会主義を選んで近代化の道を歩みました。その時の様々な特徴がありますが、遊牧に関して大事なのは、生活様式ではなく産業になったということです。もともと自分の食べ物、使うもの、それがお金になったり、商品化することがなかったわけです。産業化を象徴しているのは毛です。かつて毛を刈るということはしていなかった。儀礼はありません。他のものはミルクをとる時とか、初めての子どもが生まれたりする時、儀礼があるんですが、毛を刈ることにに関して伝統的に儀礼がみあたらない。毛を刈ることは社会主義以前はやっていなかった。せいぜい落ちたものを拾っただけです。家畜の耳に鉄を入れていたんですが、バリカンを入れて毛を刈ることはなかった。フェルトをつくる時だけは儀式がありました。落ちている毛を使ってそういうものをつくる時には儀礼があったんですが、毛に対して畜産物という感覚がなかった。それが社会主義の時代に生産活動として認識され、金を生む毛だということで、「黄金の毛」運動が始まってせっせと切っていくことになり、畜産物として搬出しました。生活様式が産業になっていくことが一つの大きな特徴です。

次に移動の縮小化が起きました。あちらこちら自由に移動することは管理しにくいので、地域によって異なりますが、豊かな地域では伝統的な行政範囲はあまり変わらない。ゴビのような地域ではかなり違う生態的な環境を一括りにして昔の行政区だったのに、途中ですっぱり割りまして、ゴビばかりと、森林ばかりと等質的な環境に区切って移動の縮小化をしています。

かつてのフレキシビリティを失う方向で遊牧の近代化をやりました。

社会主義の場合は、社会階層の平準化という課題があります。遊牧社会をどう見るかということのうち、土地法の問題もそうですが、動産社会と見たらいいのではないかと思います。不動産の社会ではなくて。動産を貴金属に換えてしまうと蓄積ができますが、貴金属に換えないで、あくまで生物、生き物の動産として持っている時代ですと12年に1度くらいの割合で雪害がやってくる。そういう時に1,000頭持っていたても10頭持っていたても0になるという点では同じ状況です。自然災害だけではありませんが、ある程度自然災害によってリセットボタンが押される。当時の蓄積を0に戻してしまう。社会の階層を固定化しない、平準化してしまうような気候の特徴、気象変動が持っていた意味が今より大きかったと思います。もちろん社会階層はありました。富に関する経済的な格差はあったけれども、それが自然に消滅するような機構を備えている社会だった。そういう機能が清朝の時代に小さくなっていく。蓄積されるようになってくる。余剰が貴金属などの物質文化に置き換えられるようになって、また一方で清朝から官位という身分上の社会階層も与えられます。単なる経済的格差ではなく貴族の末裔は位をもらえる。社会の階層が固定化していく時代がありました、近代化の以前に。

そういう時に、それを1から戻すことを社会主義がやった。ラマ教と言われるチベット仏教がモンゴルに17世紀以降、本格的に浸透していくわけですが、階層が固定化する中で、富の再分配をするという機能を果たしていたわけです。たくさん動産を持っていたても育てきれない。食い切れない。それは寄進される。寄進されたお寺はそれを委託します。出す相手は貧乏人です。労働力はあるが、家畜はないという人々に対して富の再分配を仏教寺院が肩代わりしているという機能があり「あの世の平等」を言うことによってそれが成り立つ。ところが、寺院にたまっていた家畜群、余剰家畜群が社会主義になると「搾取だ」と言われて、お寺が搾取しているとなって、その家畜がそのまま牧畜協同組合の所有になったわけです。今までのお寺からコルホーズ、ソフホーズに変わることによって「あの世の平等」ではなく「この世の平等」というコミュニズム思想で平準化される。そういうことが社会主義的近代化の中で行われていったと言えると思います。

社会の変化だけでなく生活様式の変化としての肉食化が挙げられます。今のモンゴル人たちは「肉食人種だ」と自称しています。おじいさんに聞き取りをすると夏に肉を食べた形跡はありません。家畜が死んでうれしかった、やっとありつけたと思ったそうです。今のモンゴル人は死肉を食べることはほとんどありえない。昔はたまたま死ぬことも愛でられていたくらい日常的には食べなかった。それが食べられるようになったのは産業化の結果です。オスの家畜はもともと余剰です。再生産しないから。再生産するためには30頭のメスに対して1頭のオスがいればそれでいい。それ以外のものは全部、都市に送り込んで人々が食べる暮らしになっている。今まで以上に肉食化が進みます。

こういうモンゴルの社会主義的近代化を経た後、現在はどうなっているか。エンフバヤル首相はインタビュー記事で「もはや遊牧民に余地はない。オリジナルなアイデンティティを壊す気はないが、サバイバルの方法として観光があればそれでいい」と言っています。遊牧民に対する評価は国際的に低いと言ってもいいと思います。社会主義国ではマルクス史観によって遊牧は農業未満ですから、農業にも至っていないと位置づけられました。中国では「遊牧は存在

しない」と言っています。中国の場合は事実上、定着化が進んでいるわけで「遊牧のような遅れた生活様式はない」と。これが世界の基本的な理解ですが、資本主義社会、市場経済の世界でも遊牧は否定的に見られています。かつて「ノマディズム」という映画を見ておどろきました。どこかの遊牧民の映画かなと思ったら幽霊の映画だったんです。アウト・オブ・オーダー、ノマディズムに与えられているのが「この世の秩序」から逸脱して、現世の時、ヒッピーをやっていた人が、あの世で幽霊として、この世に悪さをするという映画でした。それを見て初めて英語の「nomadism」というのがそういう意味なのかと思ってびっくりしました。それ以来、気をつけて見るようになったんですが、日本で本を売るには「遊牧」という言葉を使った方がいいと編集者は言います。しかし開発業界で遊牧ということを使うと嫌われます。研究者のロマンティックな表現だと言われる。どうしてこんな齟齬が起きるのかなと思って見てみると、1960年代、世界中のノマッドの人々、パストラルだけではなく、狩猟採集民もそうですが、移動する人々に対する定着化が積極的に行われる。国境を常に行き交う人々というのはオーダーから逸脱した不屈き千万なやつだと。農業を授けて定着化させるのが正しい開発のあり方だという見方が古くから浸透していて、FAOはnomadを「何らかの根拠地を持たずに動くことだ」と定義しています。実は世界中のnomadで全くベースもなく、いつ、どこに行くかわかりませんという人はいないと思います。フリーターだってベースはあるくらいです。こういう定義にしてしまうと実態はなくなってしまいます。実態がないものを定義したのだから、この定義を使うとロマンティストと言われるのはあたりまえで、そういう形で資本主義国でも遊牧民は阻害されていることになっています。

しかし少しずつ遊牧に関する評価も変わってきました。ユネスコがウランバートルに遊牧文明研究所をつくって世界的に毎年、国際学会を開いています。狩猟採集民と同様、古きよき伝統をセールスポイントにした観光会社が出ています。観光会社の人は自分では馬も乗れない人なんですけど、そういうことをするわけです。うがった評価ですが、再評価はされてきています。これは強調しておきたいことですが、本当に長い間、あの草原が維持されてきた根幹として遊牧の価値は再検討されてよい。草原は実は自然じゃないです。我々は草原を天然と見がちですが、天然のものではないんですね。羊が芝刈機のように食った後の状態です。羊芝刈機が草原を作っているのです。人が住んでいなくて、人の姿がそこに見えなくても来ているわけですから、切り取った風景の中に人がいるか、いないかは関係なく、人の密度は少ないですが、遊牧として利用されている限り、そこには人が入っている。家畜とともに入っていて、ある種の芝刈り状態になっています。羊は秋になると点々と移動するんですが、その時期、種子を食べては糞をまいている。芝刈り&種まきがある。そういうことが最近、自然科学系の人が調査することによって、草原をいかに家畜と人がつくっているか、天然のままに適應しているのではないことがわかってきました。草原のsustainabilityは共生関係によって生じてきたとわかってきたので、そのことが評価されつつあります。

ですが、それに関するもともと人々が持っていた知識はどうか。ここからが本題でございます。私は留学する時のプロポーザルに「モンゴルの民族学的な草の知識について学びたいです」と言って留学しましたが、4半世紀した今日でも、私は学んでいません。伝統的知識、「環境認知に関する情報体系」についてお話できることは何もないんです。どうしてこんな恥ずかし

いことが起きているかという言い訳を二つのポイントで示したいと思います。一つは社会主義体制でしたから動けなかった。そういうことをやりたいといっても授業を受けさせてもらえない。草原に行かせてもらえない。資本主義国から来た人には40キロの制限がある。そこを出るとモンゴル風のKGBに捕まって尋問されてそれはそれは大変でした。調べるチャンスが当時、少なかった。10年前に民主化してからは自由になったんですが、自由になって行ってみると、あまり皆、知らないんですね。「伝統知」があるということを前提にしていること自体に問題があるのではないかと。花は赤い花とか白い花とか色でしか分けていない。詳しく知っている人は植物学者です。伝統医は薬物を使っているの、ラマ僧は知っていますが、一般的な遊牧民は知らない。知らなくても成り立つのは家畜が自分で判断するからです。この時期、この草を食べるとか、家畜の行動を通じて知っている。動物行動学だったら彼らは詳しいかもしれないが、家畜そのものの行動に委ねてしまっている。自然の状態としては植物に対する認知は薄いのではないかというのが今の印象です。

いい時はいい、悪い時は何でもいい。悪い時は、何でも食っちゃう。それしかないから。普段の自然環境が変動するから、あまり「これがいい」とか「あれがいい」とより好みしている場合ではない。植物に関しての認識の仕方はそういうものではないかと思います。今日は野性の思考というのは、生態学的知識を越えてもって広いものだろうという観点から話を続けます。生態学的なことに関する知識、環境認知に関する情報、インフォメーションとしての知識だけが野性の思考じゃない。もっと感覚的なもの、五感で感じるとか、空間に対する認知はどうか、野性の思考はもっと広い、インフォメーションを超えたものであるということをお話したいと思っています。

面白いことにモンゴル語はもともと面積の単位を持っていません。伝統的に面積の単位がない。ガザルという単語があって、それは土地という意味です。実際には距離をも示しますが、面積を表現する伝統的な単位は持っていない。常に無限大と思っていると見ていいのではないかと思います。行政域名があるのですが、京都府と言っても京都の中心地のことしか指さない、彼らの頭の中で、面積をもつ広がりのある京都府は全然感じられていない。空間的な広がりが圧倒的にある世界の中で、空間的な広がりの中で話をしない。常に無限大であるという感覚なんですね。こういう認知をどうやってくみ取ったらいいかわからないところです。また距離に対する心理的な抵抗が少ない。距離をものとしめない伝統的な感性として評価したいと思っています。それが「伸びる感性」です。

「すたれる知識」というのは、たとえば、草に関する知識もあったかもしれないが、そういうものはどんどんすたれていってしまっているということです。他にこんなことがあります。今まで資源は自然資源だけでした。メインの資源は。しかし市場経済とリンクするようになると、市場があるなど、社会資源の方が生活上、意味を持ってくる。草がいいかどうかよりも、道のそばにあるかどうかの方が彼らにとっては意味がある。戦略上意味のあることが、この10年間、逆転してきたので、草ばえに対する無視がどんどん進んでいて、草の知識はますます今後すたれるだろうと思います。

伝統的な食品に対する知識もすたれてきています。彼らはヨーグルトをつくっていて、睡眠薬だと認識している。お酒を飲んでも平気な運転手が昼間は絶対、ヨーグルトは飲まない。そ

れは寝ちゃうから。夜にヨーグルトを食べて寝るんです。企業秘密ですけど、ある企業がマウスで実験してもそうならないが、人間が実験すると確実に効果があるそうです。ヨーグルトは夜、お食べください。勉強しすぎて疲れた人は夜ヨーグルトを食べるとよく眠れると思います。科学がようやく彼らの伝統的知識に追いついてきたという感じです。抗生物質の反対の意味でプロバイオテックスという語があります。いわば共生物質です。乳酸菌とか身体に別の生物を取り込んで一緒に生きていくことが免疫力を高めるという発想です。プロバイオテックスをモンゴル人は延々とやってきた。乳酸菌の意義に対してようやく近代的な科学は光をあてるようになってきた、追いついてきた。しかし現地ではそういうものが評価されていると思ってもみませんから、どんどん肉ばかり食べるようになってしまいました。乳製品は40種類くらい名前がありましたが、現場で見ることができるのは5種類くらいに細ってしまっています。今や伝統知はすたれる一方です。

しかし一方で伸びている感性があるというのが今日の私の話のオチです。野性の思考をインフォメーション系だけに閉じ込めてしまうと、すたれると見えるかもしれないが、それ以外にも野性の思考として考えてみると、彼らはどんどんそれを使ってグローバルに活躍し始めています。言葉が全然しゃべれなくても平気で海外へ行く。不法にビザを取得する。ネット上で国際会議があるかどうかを探す。そこへオフアを出して「私どもの誰それが参加したいのですが」とビザを取得してそのビザを売る。海洋資源の研究会とか。モンゴルで誰かが海洋資源を研究するのはかなり難しいと思います。海洋資源がないから。そういう研究をしている人としてオフアをする。民博にいと「この人は本当に研究者ですか？」とお問い合わせが時々あります。こちららも必死になって、そういう研究者がいるかどうか調べるのですが、そういうことをやりとりする中でおそらく不法でもビザ取得が可能になっているのだらうと思います。2,000ドル、3,000ドルで売り買いされています。ちゃんと新聞にも広告が出ています。渡航先で何をするか。しっかり留学して勉強して就職している人もいますが、略奪している人もいます。面白いなと思うのは、遊牧民が略奪しなくなったのは、家畜が兵器としての意味を失って近代戦になってからのことで、それ以前は世界で一番速い乗り物だったし、世界で一番強い運びものだったから、軍事集団として強い時には略奪にいくのは生業の一つであったと見てもいいと思います。余っているものをもってくるという点で、そんなに悪いことじゃない。モンゴル語では「とる」という単語の応用が広いんです。買うも借りるももらうも「とる」という一語です。「ちょっともらうよ」という時、相手がどう出るかわからなくて一生戻ってこないかもしれない。とるのはあまり悪いことではない。そのかわり、とられるのも悪いことではない。自分のところに所有して蓄積するのではない。パリにいるモンゴル人はどういう生業をしているか調べると、ブランド品をもってオランダで売る。富をそういうことで築いている。本国への送金が平均すると1ヶ月300ドルくらいと勝手に試算しています。10万人くらいは海外に出ているそうです。300ドルくらい送っていると計算するとGDPの10%くらいです。産業として海外からの送金は相当大きな意味を持っている。

こういうモンゴル人の生き方を調べて、ネオノマドとして生きていることに焦点を当てたいなと思っています。個人的なネットワークを生かして国際的な移動性を発揮して、家畜を伴って移動するのではなく、パストラルを捨てた新しい遊牧をやっているところに彼らの未来があ

るのではないかと考えています。それはモンゴルを研究している人間にとって本当は悲しいことです。なぜなら、まず何よりもあの自然環境を保全していただきたいと思ってやってきたので。ですからこれから、いかに遊牧がsustainableかということを訴えていきますが、彼らの政治的なトップがすでにパストラルを捨てているので、そこで闘うのは容易ではないです。逆転の発想で、まずノマドを褒めてからパストラルをもう一度見直す、それしかないかなと思っています。それは私の研究者としての戦略、彼らにメッセージを発する時の戦略ですが、彼ら自身もそういう方向でパストラルに関する情報はすたれてても、ノマドとしての感性はどんどん発展させる形で、地球時代を生き抜いているのではないかと思います。以上です。

（質疑応答）

渡辺 生態学的知識というより生き方の知識という意外な展開で興味深く聞かせていただきました。

フロア 余剰の家畜が出るという話、オスとメスの比は1対30だと。余裕があってということは昔からあったんですか？

小長谷 ここがモンゴルの遊牧の特徴的なところです。普通は地中海地域のイタリアで羊の写真を撮るとほとんどメスです。メスと子どもです。「おんな子ども」という表現は羊の群れにびったりなんですね。モンゴルの場合は売る相手がいません。市場がない。同じことをしている人たちはばかりです。またオスを殺さなくても飼えるだけの植生がある。これを殺さずに去勢してオスとして維持していた。モンゴルの羊の群れは去勢オスが数10%を示すほどで世界的に突出して高い。去勢して生かしておくということが特徴的で、それが軍勢力になるわけです。20世紀になると軍事利用に供せなくなりますから、それがせつせと都市へ特産物として運ばれることによって都市民を扶養していくことになるわけです。

渡辺 ダイナミックな答えが返ってきて、面白いと思います。

フロア ノマド的な感性、近代とは相反する考え方ですが、モンゴルでの学校教育はどうなっていますか？

小長谷 今、相撲がものすごく流行っています。モンゴルで。大学の授業で生徒が、先生に対して「時間ですよ」と日本語で言うんです。これで終わりですと。相撲用語が浸透している。「寄り切る」とか「夏場所」とか。面白いのは相撲に対して彼らはどんな理論を展開するかです。教育に関係するんですが、モンゴル人の能力はすごいと。もともと持っているものはすごい。日本の教育システムはすごい。だから日本にいったら相撲だけではない。もともとモンゴル人は優秀だから日本に行って教育されればどんな分野でもすごくなれる。そこから先なんです。じゃ日本のシステムを真似て、こっちも教育制度を整えようとするのではなく、「5歳くらいか

ら日本へ行こう。」という理屈が展開するんですね。institution を考えるのではなく、そこへ行けばいい、なぜ自分がつくらないといけないか。あるところへ行こうじゃないかという、資源へのアクセスが大事です。足はあるという感じです。

渡辺 ディスカッションでまた。戦いを厭わず、動いてしまうということ。

フロア 定着化政策について。首相のインタビューとして国としての政策、遊牧を禁止する政策はあるんですか。アイヌ民族の場合は明治初期に従来の風習を禁止したり、アイヌ民族を近代化するために特別な学校をつくったり、サルという武器を身にした人たちの従来の環境を変えたという歴史があるのですが、今、政府の牧畜民に対する政策があるのか？

小長谷 ラッキーなことに実際に市場経済へ以降してから具体的な定着化政策は進んでいません。それは投資を伴うものですからそれだけの投資をしていないので実際にはあまり進んでいない。社会主義時代に固定的な施設をつくる、井戸を掘って周りに住ませるという投資はありましたから、ある程度、定着化は進みましたが、民主化以降のこの10年間の定着化とは思想的なものです。実際は何らかの禁止事項が出るところまでいっていないです。

フロア トルコ近代史をやっています。sustainabilityとしての遊牧の展望。モンゴル国内で遊牧をやっている人が考えだしているのか、遊牧を研究した研究者なのか。その主体は誰ですか？

小長谷 第三者です。

フロア 外部の人ですか？

小長谷 現地の人と共同研究しているので、研究のレベルで再検討しています。伝統知と学術知との交換はまだ起こっていないと思います。夏の雨より春先の雨の方が植生との連動性がある。バイオマスが増えるとある学会に発表すると、そういうことは牧畜民は知っている。牧民はさらに、8月の雨は意味がないと、もっと先を知っている。草がしゃぶしゃぶになるからと言います。共同研究する人がきっかけであれ、伝統知とつなぐのが我々の役目だと思います。人類学という形で。彼らの生活に根ざしたところからスタートすることによって伝統と近代知の合体をしていけばと思いますが、まだそこまで行っていません。すなわち遊牧をしている当事者の展望をモンゴルの政策担当者に反映させるという役割が第三者に託されていると思います。

渡辺 今の問題も大きなものだと思いますし、主題にかかわっていると思います。それでは小長谷先生、どうもありがとうございました。